



上智大学グリーンケア研究所

2026



ご挨拶



■ グリーフケア研究所
所長 竹内 修一

日々の生活の中で、私たちは、さまざまな出来事を体験します。その中には、楽しいこともあれば悲しいこともあります。悲しいことの原因としては、自然災害・人災・事故、そして病気などが考えられます。これらは、自分の意志とは関係なく生じます。できれば、そのようなことは避けたい——それは、人間の自然的な感情からすれば、極めてあたりまえのことでしょう。

「グリーフケア」における「グリーフ」(grief)は、「悲嘆」あるいは「深い悲しみ」と訳されます。多くの場合それは、自分にとって大切な人やことが、何らかの理由で失われたときに体験する喪失感でしょうか。この喪失感、個人的なレベルのものもあれば、世界的・地球的なレベルのものもあります。例えば、紛争や戦争などによって経験する平和の喪失などは、その最たるものでしょう。

一方、「グリーフケア」における「ケア」(care)は、人間と人間との全人格的な交わりであり、すべての人が本来、人間として持っている他者に対する思いやりであり心遣いです。それゆえケアは、ただ単に医師や看護師などの専門的活動に限定されるものではありません。そのことを、シモーヌ・ローチは、次のように語ります——「ケアリングは、人間の存在様式です。」

「心は心に語る」——それは、心を込めて自分の思いを相手に伝えようとするなら、きっとそれは相手の心に届くということです。いわば、心と心の共鳴です。グリーフケアは、この延長線上にあります。先ほども確認しましたように、私たちは、できれば苦しみや悲嘆は避けたいと思います。しかしそれらは、ただ単に否定的なものではなく、その背後には、私たちが学ぶべき何らかの大切なことがあるのではないかと、とも考えられます。同時にまた、それらは、ただ自分一人で担わなければならないものではありません。むしろ、お互いに助け合い担い合ってゆくべきものなのではないかと、とも考えられます。

私たちは、どのようにグリーフケアを学ぶことができるのでしょうか。まず私たち自身が、自らの悲嘆の体験を振り返り、それが自分の人生においてどのように位置づけられるのか、そのことを思い巡らします。それによって、この体験は経験となり、真に生きた知恵となります。そのうえで、専門的な知識があれば、いっそうこの知恵は確かなものとなり、他者の悲嘆に共感し寄り添い、何らかの手伝いや助けも可能となるのではないのでしょうか。



■ グリーフケア研究所
名誉所長 高木 慶子

「悲嘆」について考えます時、多くの場合は、愛する家族や親せき、友人、恩人との死別体験者のことを考えますが、実は悲嘆状態は、狭義の意味では確かに親しい人々との死別による悲嘆状態が最も重い状態ですが、広義の意味では、只今の全世界中に恐怖と混乱をもたらしておりますウクライナ情勢やイスラエルとガザ、いろいろの戦争、また、天災、特に東南海トラフ地震や富士山の噴火などの情報が流れてまいります。また、世界経済の動向や人災など、様々の出来事が、人々を不安にさせておりますことが、それ自体が悲嘆状態に陥れているのではないかと考えております。今後、経済面やウクライナ情勢や他の戦争は、どのような方向に向かって行くのかなど不安と恐怖をこの地球に住むすべての人々に抱かせてしまうのではないのでしょうか。その状態に生きている私たち自身が悲嘆状態であると言えると考えます。つまり、悲嘆とは、各自にとって今までの生活ではあたりまえであり、大事にしていたことを喪失する体験であり、只今の世界状況では、それらのものを喪失するであろう出来事が続いていることへの不安と恐怖が人々を「悲嘆状態」にしているのではないかと考えております。

悲嘆はただに個人レベルの問題だけでなく、地球レベルでの悲嘆を考えなければならない時代になっていると考えます。今後の生活を考えるとき、これまでの概念や価値観が奪われるような経済や世界状況、温暖化などによって生活様式さえ変えなければならないような生活形態になる時を想像するとき、大きな喪失体験を経験することとなります。このような課題を抱えている状態が、全世界の人々を不安にし、悲嘆状態にしているのではないかと考えます。この状況が私たち皆を悲嘆に陥らせていることを意識することによって、生活の中でのイライラする感情が何によるのかが理解でき、自己理解と他者理解が深まり、人間関係も良好になると思います。人間関係が良好になることにより、世界中が穏やかになり、思いやりのある温厚な社会が実現されると考えております。

人は悲嘆状態にある時には、他者のことを思いやるのが難しく、自身が生きて行くだけでも大変な状況にありますから、共に利他の心と共感の感性を使って共生と共有の心を大事にして行きたいと願っております。

そのためにも、「悲嘆」について学び考える機会を多く持ちたいと願います。そのことにより、誠の平和が訪れ、人々の生活も平穏に過ごせるのではないかと考え祈願いたしております。

グリーフケアとは何か

さまざまな喪失とその痛み

人生にはさまざまな喪失がつきまといます。なかでも大きな喪失は、家族や大切な人との死別です。特に、災害や事件・事故、あるいは自死など、予期せぬ形で突然にその死別がもたらされた場合には、受けとめきれないことの方が多いでしょう。もちろん、年月を経た闘病ののちの死別の場合にも、死別を予期しての悲嘆と、死別の苦しさとがあります。また、死別以外にも、人生には、さまざまな喪失があります。

病気や怪我によって身体の一部・身体機能の一部を失った。
失恋や離婚によってパートナーと別れた。友人を失った。
伴侶や両親が認知症となった。
家族が音信不通になった。
老化により、体力や視覚・聴覚が衰えた。
ペットを亡くした。
転職や降格・昇格、退職やリストラにより、生きがい、仕事、社会的身分、自尊心を失った。
スポーツ選手が引退を決意した。
災害・事故・事件により住居や財産を失った。安全な、安心できる環境を失った。

大切な存在を亡くしたとき、愛する人がもうこの世にいないということ、あたりまえだと思っていた時間があたりまえではなかったことを突き付けられ、どうしようもない感情に襲われます。

また、戦争や災害や事件・事故では一度にたくさんの大切な人・ものが失われてしまうことがあります。一個人としてだけでなく、地域あるいは共同体全体や国家のレベルでも喪失を体験します。

このような大きな喪失に伴う、心理的・身体的・社会的・スピリチュアルな反応、全人的な痛みを「悲嘆（グリーフ）」と呼びます。

「グリーフ」とは

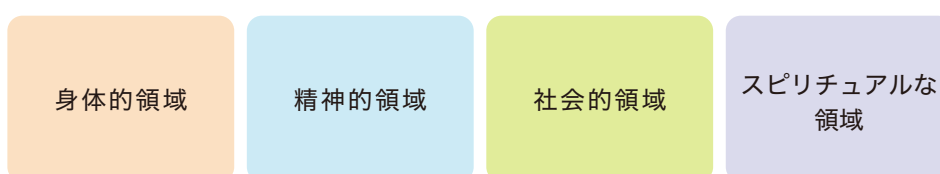
「グリーフ（悲嘆、Grief）」とは、さまざまな「喪失」、すなわち、自分にとって大切な人やもの、事柄など、何かを失うことによって起こる反応のことで、深い悲しみ、悲嘆、苦悩を意味する言葉です。

自分の思い通りの人生を送ることができる人は、誰一人としていません。充実した人生を送った人でも、やがて年老いて、病を得て、そして死に至ります。かけがえのない人とも、必ず別れなければならない日がやって来ます。死を運命づけられている人間にとって、重要な何かを喪失することで生じるグリーフは、誰しもが経験せざるを得ないという意味で、自然なものともいえます。

グリーフの現れ方やグリーフの強さは、人によってさまざまとなります。また、グリーフは、「悲しい」という感情だけにとどまりません。戸惑いや抑うつ、怒りという形さえもとりましますし、対人関係の混乱や、ときに仕事依存などの躁的な反応で、見かけ上は「立ち直った」と誤解されてしまうこともあります。「全人的な痛み」としかいいようのないものです。

1998年、世界保健機関 (WHO) は、健康の定義を再吟味し、「身体的 (physical)」、「精神的 (mental)」、「社会的 (social)」の3領域に加え、「スピリチュアル (spiritual)」な領域についても、健康をとらえることを提案しました。人が健康であるためには、この4つの領域をケアしていくことが大切であるといえます。また、さまざまな喪失によってグリーフ (悲嘆) が生み出されたとき、人は、身体的領域、精神的領域、社会的領域、そしてスピリチュアルな領域の4つで、全人的に痛みを味わうと考えられます。

世界保健機関 (WHO) の健康の定義の提案



グリーフを受けると、たとえば、身体的領域では、極度の疲労、頭痛や不眠、食欲不振や持病の悪化、その他のさまざまな肉体的変調をきたすことがあります。精神的領域では、悲しみや怒り、罪悪感や自責の念、孤独感や疎外感、抑うつあるいは躁の状態、アルコールや薬物への依存や過剰な行動への耽溺などを生じることがあります。また、社会的領域では、家庭内の役割や社会的立場の変化、対人関係の混乱、ギャンブルへの耽溺や自暴自棄な浪費などの形を取ることもあります。

人は、誰しもスピリチュアリティを持っています。スピリチュアリティという言葉には、適当な日本語訳がなく、専門家のあいだでも定義が固まっていません。一般的には「精神性」、「宗教性」、「靈性」などと訳されておりますので、“人が人として生きる味わい、人間を人間たらしめる働き”などと考えることもできるでしょう。

何らかの喪失を体験してグリーフ (悲嘆) を抱えたとき——に、この“人が人として生きる味わい、人間を人間たらしめる働き”——スピリチュアリティ——が、見失われることがあります。

「喪失」を取り戻すことはできません。時間は戻らず、かけがえのないものに代わりはありません。とはいえ、生活を「回復」していく道がないわけではありません。身体的、精神的、社会的、そしてスピリチュアルな領域のそれぞれにおいて、失われたもののかげがえなさを、そばにいる人に一緒に確認してもらい、回復のお手伝いをしてもらうことはできます。

グリーフケアとは、「喪失」を体験し、全人的、特にスピリチュアルな痛みを抱えた方々に心を寄せて、寄り添い、ありのままに受け入れて、その方々の回復や成長、希望を支援することです。

グリーフケアの必要性の高まり — 現代日本人の死への恐れ —

日本社会の近年の変化は、死別の苦しみや痛みを人々がどう受け止めるかも変えました。これまで地域社会や伝統文化があたりまえに担ってきたグリーフケアの機能は失われつつあります。

人生のさまざまな苦悩や悲嘆に対して、宗教的な説明や手当てを期待しない人は以前からいました。伝統的な宗教は現在も残っていますが、現代の生老病死の現場にはその影響力は届きにくくなっています。故人を思い出し、悼み、遺族との関係を再強化する営みでもあった葬送儀礼は形骸化してしまい、できるだけ簡素にしたいと考える人も多くなっています。

戦後、多くの人々が大都市に移り住み、単身世帯や核家族中心の世帯が圧倒的多数を占めるようになり、遠方に通勤する人々は近所づきあいを重んじなくなりました。一方、就業機会が減少している地方都市では若年層の比率が下がり、結果として、地方都市でも地域社会の支援が難しくなっています。高齢者が更なる高齢者を介護する「老老介護」には限界があり、独居高齢者の孤独死も少なくありません。

医学の進歩はさまざまな結果をもたらしました。多くの病気が治療可能になり、長い人生を楽しめる人が増えた現在、日本は他に類を見ない超高齢化社会を迎えています。職場復帰できるがん患者も多くなりましたが、再発の不安は残りますし、社会的立場の変化もあります。残り時間を慮っての予期悲嘆など、患者や家族の痛みは消えるわけではありません。

1970年代以降、自宅よりも病院で亡くなる人が多くなり、近親者の死を身近に経験する機会、死と向き合

う機会は少なくなりました。現代の多くの日本人は、年長者が死に向きあう姿、死にゆく人と関わる姿を知らないまま、自分自身や大切な人の死に対して、しばしば一人で向き合わねばなりません。

現代は一人ひとりが、自らの生きがいを求める時代、人間らしい死に方を求める時代でもあります。「終活」と呼ばれる、人生の締めくくりの模索が広がっています。延命に関わるたくさんの難しい選択も求められません。選択した結果を、あとから後悔することも少なくありません。

死は、人間の理解を超え、コントロールできないものです。自分自身や家族の病气や死去などで、あたりまえと思っていた生活はあっという間に崩壊します。また、地震、台風、大雨などの自然災害、無差別の殺傷事件、自動車、鉄道、航空などの交通機関の事故などによって、全く予期せぬ形で、日常生活や地域社会が崩壊してしまうこともあります。予期せぬ死に対して、「なぜ」という答えようのない疑問、「あのときこうしていれば」という際限ない後悔や自責が生まれます。

現代社会は、科学的合理性と経済性を追求する社会です。社会は常に発展し、努力すれば誰もが願いを叶えられると信じられている社会でもあります。人間にとって死は逃れられないものであるのですが、現代日本社会は、死について考えるのを避けるようになってしまっています。このため、現代日本人は、死やさまざまな喪失を受け入れる準備、予期し得ない事態にうまく対応する準備が十分にできていないのです。

現代日本社会でグリーフケアの必要性が高まる理由

死生観の空洞化

伝統宗教の衰退
葬送儀礼の形骸化
終活の模索

地域社会の弱体化

独居世帯・核家族世帯の増加
地方都市の若年層減少
老老介護、孤独死

医学や科学の進歩

超高齢化社会
最善の選択の模索
予期悲嘆や再発の不安

死や喪失への準備不足

科学と経済を優先する社会
死を考えない社会
予期せぬ事態への準備不足

グリーフケアを届けたい現場・グリーフケアを必要とする現場

【医療の現場】

人間らしい人生の締めくくり方を求める患者の方々やそのご家族（ご遺族）、在宅医療の現場、また、手を尽くされた医師や看護師などの医療スタッフにグリーフケアを届けたいと願います。

【災害の現場】

地震や台風など、大きな災害で苦しむ方々に、形ある物とともに、形のないグリーフケアを届けたいと願います。

【事件や事故の現場】

鉄道や航空の重大事故や自動車事故あるいは犯罪により予期せぬ形で家族と死別した方、生活の基盤を奪われた方のところに、グリーフケアを届けたいと願います。

【福祉や介護の現場】

福祉施設やご自宅での介護の現場で、ご本人やご家族にグリーフケアを届けたいと願います。

【自死遺族】

自死による死別で残された遺族は、自責の念や罪の意識、周囲の視線への意識などに苦しんでいます。そこにグリーフケアを届けたいと願います。

【葬儀】

葬儀は、故人の生き方を確認し、故人を偲ぶ、大切なグリーフケアの場です。遺族や参列者に寄り添うものとして、あるいは葬儀を司式する宗教者や葬儀をお手伝いする葬儀社のスタッフとして、グリーフケアを届けたいと願います。

【日常】

私たちの日常は、大小さまざまな喪失に満ちています。ケアの専門職ではないとしても、職場や地域社会あるいは日常生活で、痛みをかかえる人のそばにいて、のびる人を育てて、そこにグリーフケアを届けたいと願います。

グリーフケアを担う人々

東日本大震災以降、宗教者が担うべきケアが広く期待されるようになってきています。

臨床宗教師は、布教・伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、被災地や医療機関、福祉施設などで、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添う宗教者です。

西洋では、教会のほか、医療機関や福祉施設などの非宗教的な施設や組織にも身を置いて働く聖職者を「チャプレン」といい、患者（利用者）、家族、スタッフの、心理的、宗教的、スピリチュアルなニーズを支援してきた歴史があります。我が国でもチャプレンやビハーラ僧を置く病院が増えつつあります。

また、人間らしい終末期を求める緩和医療、在宅医療、救命救急医療などの医療機関に勤務する医師や看護師、さまざまな福祉や介護の現場のスタッフ、教員やカウンセラーなど教育機関のスタッフ、被害者のケアにあたる警察官や消防署員、あるいは葬祭業者など、悲嘆を抱えた方々に接する専門職が、自らの職務を通してグリーフケアを実践しています。

さらに、ボランティアとして、医療・福祉等の現場、事件・事故あるいは災害等の現場、その他さまざまな現場において、グリーフを抱えた方々に寄り添い耳を傾けることで、ケアを行う方や、遺族会や患者会などでファシリテーションを行う方なども多数おられます。

グリーフケア人材の養成と資格

グリーフケアへの関心の高まりとともに、さまざまな団体や個人が、グリーフケア、あるいはスピリチュアルケアの従事者のための教育プログラムや研修会・講習会を開催するようになってきました。

これらの中で、最も組織的かつ体系的に教育プログラムを展開しているのは、一般社団法人日本スピリチュアルケア学会と一般社団法人日本臨床宗教師会です。また、上智大学グリーフケア研究所も、独自資格を付与しています。

【一般社団法人日本スピリチュアルケア学会による「スピリチュアルケア師」について】

一般社団法人日本スピリチュアルケア学会は、「スピリチュアルケア師」資格について独自の認定制度を設けています。

スピリチュアルケア師とは、医療・福祉・教育・産業・司法などのさまざまな分野で、他分野の専門職と連携して、スピリチュアルケアに携わる専門職です。その専門性や役割に応じて、「臨床」「専門」の2つの区分があります。

スピリチュアルケア師の認定制度は2012年に立ち上げられ、2013年度より、資格者の認定がスタートしました。資格取得のための教育課程は、日本スピリチュアルケア学会が認定する教育プログラムより提供され、国内さまざまな地域に拠点をもち、特徴ある活動を展開する10の機関が、その認定を受けています(2026年3月現在)。グリーンケア研究所は、スピリチュアルケア師制度の発

足当初から認定を受ける教育プログラムのひとつです。

資格の期限は取得後5年とされ、5年間に日本スピリチュアルケア学会が定める基準を満たした場合、資格の更新が認められます。

グリーンケア研究所が開講する「グリーンケア人材養成課程(2年制)」を経て「資格認定課程(1年制)」の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、同学会が認定する臨床スピリチュアルケア師資格審査の受験資格を得ることができます。

また、臨床スピリチュアルケア師の有資格者で、グリーンケア人材養成講座「専門課程(1年制)」の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、同学会が認定する専門スピリチュアルケア師資格審査の受験資格を得ることができます。

【一般社団法人日本臨床宗教師会による「認定臨床宗教師」について】

一般社団法人日本臨床宗教師会は、同会の独自資格である「認定臨床宗教師」の認定制度を設けています。

臨床宗教師とは、被災地や地域社会、あるいは医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者で、欧米のチャプレンに対応するものです。宗教者が自らの宗教宗派の布教や伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰あるいは無宗教などの立場を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添い、さまざまな専門職とのチームケアに参加します。宗教者として全存在ををかけて、人々の苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえのない方一人ひとりの物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られる価値観やスピリチュアリティを尊重してケアを行う専門職です。

臨床宗教師の呼称には、チャプレン、ビハーラ僧、パストラルケアワーカー等のさまざまな呼び名を包括し、宗教宗派を超えて宗教者が協力するという願いが

込められています。仏教、キリスト教、神道など、さまざまな信仰を持つ宗教者が協力し合い、2016年2月、「日本臨床宗教師会」が設立され、2017年2月、「一般社団法人日本臨床宗教師会」として法人登記されました。2026年3月現在、指導者を含めて、215名の方が認定臨床宗教師の資格を得ています。

同会は、臨床宗教師を養成するためのカリキュラムを定め、同会が認定する養成機関で所定の教育プログラムを履修し、養成機関から推薦を得た宗教者を対象に資格認定を行っています。同会が認定する臨床宗教師養成機関は8団体あり、上智大学グリーンケア研究所もそのひとつです。

上智大学グリーンケア研究所が開講する「グリーンケア人材養成課程(2年制)」を経て「資格認定課程(1年制)」の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方で、かつ、宗教者の資格を有する方は、「認定臨床宗教師」の資格取得申請を行うことができます。

【上智大学グリーンケア研究所認定臨床傾聴士】

上智大学グリーンケア研究所では、「グリーンケア人材養成課程」(2年制)の所定の単位を修得し、総合審査に合格した修了者に、上智大学の独自資格である「上智大学グリーンケア研究所認定臨床傾聴士」を付与しています。

グリーンケア、スピリチュアルケアにおいて、ケア提供者の役割は、グリーン(悲嘆)やスピリチュアルな痛みを抱えた方に寄り添い、そして、その方の思いに耳を傾けることにあります。「臨床傾聴士」の名称は、「寄り添い」と「傾聴」の重要性によるものです。

上智大学グリーンケア研究所について

研究所設立の経緯

グリーンケア研究所は、グリーンケアの必要性の高まりを受けて、日本で初めてグリーンケアを専門とした教育研究機関として、2009年4月に設立されました。

2005年4月25日にJR西日本の福知山線で発生した列車脱線事故の教訓を生かし、社会に役立つ取り組みの一環として、事故のご遺族の方々をはじめとした悲嘆者に対するグリーンケアを実践するために役立つことを目的に、JR西日本及び公益財団法人JR西日本あんしん社会財団の全面的なご支援により、公開講座「悲嘆について学ぶ」、そしてグリーンケアの実践を遂行できる専門的な知識・援助技術を備えた人材を育成するグリーンケア人材養成講座を開講しました。

2010年4月、グリーンケア研究所は上智大学に移管され、上智大学大阪サテライトキャンパス（大阪市北区）と東京の四谷キャンパスの2ヶ所で活動してい

ます。

上智大学の教育精神は、“For Others, With Others”（他者のために、他者とともに）を実践できる人を育てることにあり、学問研究及び社会貢献を通じて、「人間の尊厳 (human dignity)」を脅かす課題—— 貧困、環境、教育、倫理—— の解決に貢献することを使命としています。

グリーンケア研究所は、上智大学の附置研究所のひとつですが、グリーンケア、スピリチュアルケアにかかる調査研究のみならず、グリーンケアの実践を遂行できる専門的な知識・援助技術を備えた人材を養成し、我が国におけるグリーンケアの理解・啓発を行い、グリーンケアを抱える者「悲嘆者」がケアされる健全な社会の構築に貢献することを目的として活動しています。

研究所の年譜

2009年4月	聖トマス大学に「日本グリーンケア研究所」を設立 「グリーンケア人材養成講座」を聖トマス大学にて開講 グリーンケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を聖トマス大学にて開講
2010年4月	「上智大学グリーンケア研究所」として上智大学に移管
2010年10月	グリーンケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を上智大学四谷キャンパスにて開講
2011年2月	グリーンケア公開講座「悲嘆について学ぶ」（聖トマス大学）を閉講
2011年4月	上智大学大阪サテライトキャンパスの開設に伴い、 「グリーンケア人材養成講座」の一部を、大阪サテライトキャンパスにて開講
2012年4月	「グリーンケア人材養成講座」をすべて上智大学大阪サテライトキャンパスにて開講
2014年4月	四谷キャンパスにて、「グリーンケア人材養成講座」を開講 グリーンケア人材養成講座の課程・カリキュラムを改訂し、 「認定課程（基礎コース・臨床コース）」を開講
2016年5月	龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターとの共催により、 京都にて公開講座「悲しみを生き抜く力」を開講
2017年4月	グリーンケア人材養成講座の課程・カリキュラムを改訂し、 「グリーンケア人材養成課程」（2年制）を開講
2017年5月	龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターとの共催により、 グリーンケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を大阪サテライトキャンパスにて開講
2018年4月	「専門課程」（1年制）を開講
2019年4月	「資格認定課程」（1年制）を開講

研究所の主な活動

◆グリーフケア人材養成講座

関西では、2009年(平成21年)4月から、東京では、2014年(平成26年)4月から、グリーフケア人材養成講座を開講しており、2025年度までに、大阪、東京を合わせて約1,500名の修了生を送り出しています。

グリーフケア人材養成講座の受講生は、医師、看護師、福祉職、教育職、カウンセラー、宗教職などの対人援

助職に従事しながら、ケア提供者として知識技術を向上させようとする方々や、自らの喪失体験を契機として、遺族会や病院その他の施設でボランティア活動をすべく、グリーフケア、スピリチュアルケアについて深く学ぼうとする方々が多数います。現在、3つの課程を開講しています。

グリーフケア人材養成課程(2年制)

定員：東京48名 大阪27名

文部科学大臣より「職業実践力育成プログラム(BP)」の認定を受けた課程です。また、厚生労働大臣より「専門実践教育訓練給付金制度」に認定された課程でもあります。

2年間に17科目28単位、合計370時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方には、上智大学グリーフケア研究所が認定する「臨床傾聴士」の資格を付与します。

資格認定課程(1年制)

定員：東京18名 大阪12名

文部科学省の「履修証明プログラム」の課程です。

「グリーフケア人材養成課程」の修了者を対象とした課程です。1年間に13科目20単位、合計200時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、日本スピリチュアルケア学会が認定する「臨床スピリチュアルケア師」の受験資格を得ることができます。

専門課程(1年制)

定員：7名

文部科学省の「履修証明プログラム」の課程です。日本スピリチュアルケア学会が認定する「臨床スピリチュアルケア師」の資格を有している方を対象とした課程です。1年間に10科目18単位、合計160時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、日本スピリチュアルケア学会が認定する「専門スピリチュアルケア師」の受験資格を得ることができます。

❖養成する人材像

上智大学の教育精神、“For Others, With Others”(他者のために、他者とともに)に基づき、死生学を基盤とし、さまざまな喪失によるグリーフ(悲嘆)を抱える個人や共同体に対して、スピリチュアルケアを提供できる人材の養成を目指します。

グリーフを抱える個人や共同体が持っている死生観やスピリチュアリティの多様性を前提として、スピリチュアルな課題(スピリチュアルペイン)に直面している悲嘆者に対し、ケア対象者・ケア提供者がともに各自の死生観・スピリチュアリティを十全に生きるケア関係の構築を目指し、深い臨床理解と変化に柔軟に対応したケア実践ができる人材を養成します。

具体的には、医療、保健、社会福祉、介護、教育、宗教活動、その他、臨床の現場での対人援助の専門職としての活動において、グリーフケア、スピリチュアルケアを提供できる人材、あるいは、遺族会・患者会等のサポートグループのファシリテーション、ケア提供者のピアケアのリーダーシップを取れる人材を養成します。また、ボランティアとして、医療・福祉等の現場、事件・事故あるいは災害等の現場、その他さまざまな現場において、グリーフ(悲嘆)を抱えた方々に寄り添い、耳を傾けることで、ケアを行うことができる人材を養成します。

【修了後の活動】

グリーフケア人材養成講座の受講生のうち、医療、保健、社会福祉、介護、教育、宗教活動、その他、臨床の現場において「対人援助職」に従事している方は、修了後、職務を通してグリーフケア、スピリチュアルケアを実践することが期待されます。

実習を受講した際の実習機関に、引き続き修了後もボランティアとして活動する方、既存の遺族会やボランティア団体で活動される方、あるいは新たにNPO法人等を設立して、グリーフケア、スピリチュアルケアの活動を開始される方もいます。

また、グリーフケア、スピリチュアルケアについてさらに研鑽を深めるべく、上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻をはじめ、大学院に進学する修了生も多数います。

【グリーフケア研究所による修了生へのフォローアップ】

グリーフケア研究所では、グリーフケア人材養成講座の修了生のための講演会の開催や実践・研究活動の報告の場の提供、また修了生同士のコミュニケーションを支援するなど、修了生がさらに研鑽を積むことができるよう支援しています。

◆グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」

グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」は、我が国におけるグリーフケアの理解、啓発の一環として、受講生の方がグリーフ（悲嘆）を抱えた方々の悲しみ、苦しみに共感し、ともに歩むことができるように、さまざまな分野や現場で活躍されている方を講師としてお招きし、その経験をうかがい、事件や事故、災害、

病気などで愛する人を亡くした方々の悲しみや苦しみに共感し、ともに歩むための方策を考えることを目的として開講しています。

2026年度は、春・秋の年2回、各6回、オンラインで開講します。

◆協力事業

グリーフケア研究所では、国や地方公共団体、企業等からの依頼により、グリーフケア、スピリチュアルケアに関する研修会に講師を派遣しています。

たとえば、栃木県足利市の「The あしかが学」に講師を派遣しています。

また、2012年、2013年、2017年には、東日本大

震災の一回忌、三回忌および七回忌にあたって、「東日本大震災追悼の集い」を開催しています。

なお、定期的で開催する公開講座とは別に、学内外の諸団体との共催、あるいはグリーフケア研究所の単独開催により、講演会やシンポジウムを開催しています。

◆刊行物

グリーフケア研究所の研究紀要として『グリーフケア』誌を、毎年度刊行しています。「上智大学学術情報リポジトリ」で閲覧できます。

また、研究所の取り組みの成果として、『グリーフケア入門』（編著：高木慶子、上智大学グリーフケア研究所、2012年4月 勁草書房）、『〈悲嘆〉と向き合い、ケアする社会をめざして－JR西日本福知山線事故遺族の手記とグリーフケア－』（編著：高木慶子、上智大学グ

リーフケア研究所、柳田邦男 2013年2月 平凡社）、『悲嘆の中にある人に心を寄せて 一人は悲しみとどう向き合っていくのか－』（編著：高木慶子、山本佳世子 2014年3月 上智大学出版・ぎょうせい）、『ともに悲嘆を生きる グリーフケアの歴史と文化』（著：島蘭進 2019年5月 朝日選書）などを刊行しています。

◆他大学との連携

グリーフケア、スピリチュアルケアに従事するケア者を養成する教育プログラムを有する大学の教育研究機関と相互交流を図り、公開講座や講演会の開催、教員・指導者の交流により、教育プログラムの充実改善を図っています。

◆新型コロナウイルスへの対応を経て

2020年度から、グリーフケア研究所が開講する人材養成講座および公開講座では、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインでの講義を行いました。オンラインならではの利点をいかし、現在では、平日の人材養成講座の授業と公開講座をオンラインで実施しています。

◆ グリーフケア研究所と大学院実践宗教学研究科

2016年度に上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻修士課程を開設、2018年度には、同研究科同専攻に博士後期課程を開設しました。2026年3月現在、11名の方に博士号の学位を授与しました。

実践宗教学研究科死生学専攻は、グリーフケア研究所におけるグリーフケア、スピリチュアルケアに関する研究とグリーフケア人材養成講座の実績を基盤としていますが、臨床スピリチュアルケアを中心とした実践的な関心に基づく死生学と、現代社会で生じるさまざまな問題に対して、宗教文化や倫理思想的伝統を踏まえて対応する実践宗教学の展開を目指しています。

グリーフケア研究所は、大学院実践宗教学研究科死生学専攻と密接に連携しながら、「宗教と公共性、宗教

間対話・宗教協力」、「死生観、医療現場・先端科学技術の倫理」、「いのち・平和・環境をめぐる価値観」、「医療・福祉・教育におけるスピリチュアルケア及び災害・事故・事件・自死に関わるグリーフケア」を課題として、グリーフケアにかかる人材の養成と啓発活動に一層の力を注いでいく所存です。

人は、誰も近親者や友人知人を亡くす経験をします。近親者や友人知人との死別に限らず、さまざまな悲嘆を抱えた方は多数おられますし、自分自身もまた、いつか悲嘆者となるかもしれません。

悲嘆者とともに生きる社会、互いに支えあう社会の構築を、ご一緒に目指しましょう。

◆ 研究所の構成員

(2026年4月1日現在)

職名	氏名	所属等	職名	氏名	所属等
所 長	竹内 修一	上智大学神学部神学科特別契約教授、カトリック司祭(イエズス会)	客員所員	柿森 千草	学校法人聖路加国際大学聖路加国際病院相談員
名誉所長	高木 慶子	生と死を考える会全国協議会会長、カトリック修道女(援助修道会)	客員所員	柏木 哲夫	淀川キリスト教病院相談役、大阪大学名誉教授、ホスピス財団理事長
副 所 長	西平 直	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	加藤 眞三	慶応義塾大学名誉教授、東海大学医学部非常勤講師、エムオーエー高輪クリニック院長
副所長補佐	篠田 美香	上智大学グリーフケア研究所講師	客員所員	窪寺 俊之	関西学院大学元教授、日本臨床死生学会常任理事
所 員	栗原 幸江	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	島蘭 進	東京大学名誉教授、大正大学客員教授
所 員	大村 哲夫	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	西岡 秀爾	曹洞宗崇禪寺住職、四天王寺大学・花園大学・愛知学院大学非常勤講師
所 員	葛西 賢太	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	浜渦 辰二	大阪大学名誉教授
所 員	佐藤 啓介	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	濱口 一則	ドムスガラシア代表
所 員	寺尾 寿芳	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	ベッカー, カール	京都大学IPS細胞研究所上廣倫理研究部門(研究員・京都大学名誉教授)
所 員	武田 なほみ	上智大学神学部神学科教授	客員所員	松田 真理子	京都文教大学臨床心理学部教授、京都文教大学大学院臨床心理学研究科長・心理臨床センター所長
所 員	原 敬子	上智大学神学部神学科教授	客員所員	松本 信愛	医療法人ガラシア会常務理事、チャブレン
所 員	酒井 陽介	上智大学神学部神学科教授	客員所員	水嶋 章郎	順天堂大学大学院医学研究科緩和医療学特任教授・名誉教授
所 員	鈴木 伸国	上智大学文学部哲学科教授	客員所員	森 清顕	北法相宗宗務長、清水寺執事、泰産寺住職
所 員	横山 恭子	上智大学総合人間科学部心理学科教授	客員所員	山岡 三治	上智大学名誉教授、カトリック司祭(イエズス会)イエズス会ロヨラハウス館長
所 員	安井 優子	上智大学総合人間科学部社会福祉学科特任助教	客員研究員	栗津 賢太	
所 員	三次 真理	上智大学総合人間科学部看護学科教授	客員研究員	笥 智子	
所 員	浅見 昇吾	上智大学外国語学部ドイツ語学科教授	客員研究員	井口 真紀子	
客員所員	伊藤 高章	中央学術研究所研究員	研究補助員	豊田 実和子	
客員所員	大柴 譲治	日本福音ルーテル大阪教会牧師、学校法人ルーテル学院理事長、るうてるホーム理事長・チャブレン	研究補助員	櫻井 唯乃	
客員所員	大橋 容一郎	上智大学名誉教授、ケーブル会会長、日本アスペン研究所諮問委員			
客員所員	岡村 毅	東京都健康長寿医療センター研究所副部長			



上智大学グリーフケア研究所

■ 東京・四谷キャンパス

〒102-8554 千代田区紀尾井町 7-1
電話 03 (3238) 3776
E-mail : griefcare@sophia.ac.jp

■ 大阪サテライトキャンパス

〒531-0072 大阪市北区豊崎 3-12-8
サクラファミリア 2階
電話 06 (6450) 8651
E-mail : i-grief@sophia.ac.jp

<https://sophia-griefcare.jp/>

